
時の記憶

紅い羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の記憶

【著者名】

紅い羽

N6067D

【あらすじ】

俺は夢をよく見る普通の中学生。夢をよく見ると云つても、同じ夢ばかり。なにがあるのだろうか。ま、あまり深く考えないようにしてよつ・・・。でも、やつぱり気になるな・・・。

すべての始まりは・・夢（前書き）

あるゲームを基に作ってみた小説です。
冒険物語です。

すべての始まりは・・夢

？？？「・・・何のためにこんな事するの？何の利益も・・・無いはずでしょ・・・」

？？？「五月蠅い。負けたお前なんぞがそんな口きて良いのか？」

？？？「くつ・・・・兄・・・さん・・・ビリして・・・・・」

兄「この大陸を統一しなければ、この大陸が滅びてしまうのだ」

弟「でも、それがなんで僕を・・・こんな事に・・・」

兄「・・・・・。お前は・・・戦が嫌いだつたから、大陸統一の話を素直に聞き入れてくれるわけない・・・と、思つてな」

弟「・・・・・

兄「・・・情けない兄ですまなかつた」

弟「兄・・・さん・・・・・。言つてくれれば・・・よかつたのに・・・・・」

兄「・・・・・すまない」

弟「『』めん、兄さん。僕・・・先に・・・逝くよ」

フツ・・・・・

兄「また、どこのかで会おう。……転生してもな……」

？？？「……弟よ……むにゅやむにゅや……」

？？？「兄さん、起きて、起きていってばーーー。」

兄「うーん」

弟「おはよう、兄さん」

兄「……おはよう、圭哉。^{けいや}いつも早起きだな」

弟（=秀哉）「兄さんが遅いだけだよ」

兄「……」

一人の母「秀哉、圭哉、早く降りてらっしゃいー。」

兄（=秀哉）&圭哉「はーい」

（秀哉視点）そして、俺たちは階段を駆け降りて、朝食をとった。

一人の父「……最近、世界のあちこちで人が突然消える現象が起ころうじい……」

一人の母「怖いですね。あなた達も気をつけね」

圭哉「うん

秀哉「・・・」

(秀哉視点) そして、俺たちは学校へとむかつた。

この中の日々の生活が・・・

少年A「よお、圭哉。今日もお兄ちゃんの護衛付きで」登校か?」

少年B「たくましこお兄さんだもんなー」

俺の同級年の野口一知が圭哉にからんでくる。

秀哉「悪いが、やー、退いてくんねーか?」

俺が睨み付けると、あつたり逃げていった。
いつものことだからあんまり気にしない。
・・・少なくとも俺の話だが。

いつも毎日この退屈な授業も終わり、いつも毎日兄弟と帰
つていた。

秀哉「なあ、圭哉、正直言って学校嫌なんじゃねーのか?」

圭哉「・・・。本当は嫌だよ。でも、勉強しなきゃこけない・・・」

秀哉「やっぱりな」

圭哉「・・・」

秀哉「そつだ、明日、俺とどこかに遊びに行こうぜーーー」

圭哉「ダメだよ」

秀哉「良いんだよ。そりだな……探検にでも行くか……！」

圭哉「……うん」

(秀哉) そして翌日。俺は日が覚めた。って、あれ?

秀哉「……、何処だあああああー————！」

なんと、俺は目が覚めるとベッドの上ではなく、誕生日の上に寝転がっていた。

圭哉「兄さん?」

秀哉「圭哉! お前、その格好は……?」

圭哉は、主に赤色で、所々に青色の装飾が施されている長いローブを着ていた。

圭哉「さつき目が覚めたら、こんな風になつてたんだ。それより、兄さんの格好……？」

秀哉「へ?」

ふと、俺が着ている服を見てみると……明らかに鎧だ。かなり頑丈そうだ。

秀哉「……あれ?」

圭哉「兄さん、どうしたの?」

見覚えがある . . .

どこかで見たことがある . . .

どこかで . . .

夢の町・・・? (繪書き)

多少分からなことがあるかと思こまするので、詳しへは下の後書きを「」見下せ。

夢の町・・・？

どこかでみたことがある・・・
どこかで・・・

そうか！思い出した！－

見覚えがあると思つたら、あの夢だ！－

・・・だつたとしたら、ここは、あの夢の世界？？

圭哉「ねえ、兄さん、あつちに町が見えるよ」

秀哉「・・・町が見えるから・・・？」

圭哉「そこに行つて、ここは何処か聞こつ つて思つたんだよ」

流石は俺の天才弟。

頭だけは、一いつも学年が上の俺の宿題をすりすり解くぐりこの
ヤバさだからな。

- と同時にとで、町にて聞き込み調査開始 -

青年A「ここには、スマニア大陸のカルベザンヌ領、グリグゴラの
町だよ」

秀哉「うーん、大陸だの領だの町だの、いぢやまぜになつちまつて

よく分かんねーよ

青年A 「うーん、困ったなあ・・・」

圭哉「あ、気にせず続けてください。あとで僕が説明しておきますから」

青年A 「ま、いいか。んじゃ、続けるよ、えっとー・・・」

青年B 「もしかして君らさ、最近行われるって言つたり剣技大会の選手だつたりして」

秀哉「剣・・技・・・大会?」

圭哉「それに優勝賞金とかつて・・・」

青年B 「あれ、知らなかつた? 優勝賞金? もちろん、それ田端で出るヤツもいるぐらいだからな」

圭哉「ちなみにいへりほど・・・」

青年B 「確かに、去年が五千万セル、その前の年が四千万セル・・・」

青年A 「今年は六千万セルぐらいか」

青年B 「だらうな

圭哉「お話、ありがとうございました」

青年A 「おうよ、氣い付けてなあ」

秀哉&圭哉「さよーならー」

秀哉「剣技大会・・・」

圭哉「優勝賞金・・・」

・・・・・

秀哉&圭哉「あのやつ」

(秀哉) ・・・」「こいつは氣付いて居ませんか? ・・・

圭哉「兄さん、お願いがあるんだけど・・・」

秀哉「何?」

圭哉「剣技大会に出て欲しいんだけど・・・」

・・・・・

秀哉「・・・はあ? ! 僕に剣を振り回していく男どもをぶん殴つてこいつていうのかよ! ?」

圭哉「いや、そこまでは言つてないけど・・・」

秀哉「でも・・・いいぜ」

圭哉「! ? なんで? ? あんなに反抗したのに! ?」

秀哉「そりゃー、弟の頼みだゼー。・・・断れねーだろーが。それに・・・」

圭哉「それに・・・？」

秀哉「ほらっ、あれだよ、あれー！」

圭哉「フフッ、分かつた、分かつたよ

秀哉「いつも兄さんが物事を」まかすときの姉セリフ「あれだよ、あれ！」

圭哉「またくだなあ・・・兄さんは。

秀哉「つたぐ・・・とつあえず、出づやいいんだが、出ればーーー。」

圭哉「うん、頑張つてね、兄さん！..」

秀哉「んじゅ、出るんだつたらハントコ参加申込しねーとな

圭哉「剣も探さなくつちやね」

夢の町・・・？（後書き）

この話の世界の常識

「大陸や領、町」

基本的に、

大陸＝現在の国（例えば日本）

領＝現在の細かな集まり（都道府県）

町（この話に出てくる市や村）＝現在の町

（現在の市や村）

と思っていただければ簡単かな　と思います。

「セル」

ここではお金の単位。

一セル＝日本円にして一円です。

剣技大会当日（前書き）

ちょっととグロい表現が入っています。
苦手な方はお避け下さい。

剣技大会当日

- 剣技大会当日 -

秀哉「こんなボロそなんで大丈夫かよ・・・」

俺が持っているのは、昨日町で見つけた格安の剣だ。
大きさ的には普通だが、見た目がいかにもお古つて感じだ。

圭哉「きっと、何とかなるよ」

秀哉「珍しいな、お前にしてはあやふやな返答の仕方だな」

圭哉「仕方ないよ。この先、何が起こるか分からぬからね」

秀哉「・・・ま、確かにそつか」

司会・男「おはようござります!! 選手の皆さん、そして、観覧席
にいらっしゃる皆さん、スタッフの皆さん」

司会・女「朝早くからお集まりいただきありがとうございます」

(秀哉) ながつたらしい・・・

(圭哉) 仕方ないでしょ。大会なんだし、人も多いし。整理するだけで大変なんだから

司会・男「とりあえず、簡単に縛の説明をしよう」

司会・女「トーナメント式で、一対一で行います。対戦相手はくじで決められ、ランダムになります。つまり、運次第」

司会・男「ちなみに大戦中は、審判の下で行い、縛に反したものは即退場バトルチャウジヤツセイコータイとされる」

司会・男「それじゃあ、1回戦第1試合……」

司会・女「次は1回戦第32試合田・・・エラコルダさん対シユウヤさんの試合です！両者は対戦場フィールドへ！」

エラコルダ「よろしく頼むぜえ」

秀哉「こちらこそ」

圭哉「・・・」

(圭哉) エラコルダって人は、見た目全く日本人じゃないのに言葉が通じてる・・・
どうしてだろう・・・

司会・男「両者そろつたようです。では試合開始バトルスタート！」

秀哉「行くぜ！？」

エラコルダ「かかつてこい」

秀哉「おりやつ！！」

グサツ

エラコルダの左肩に秀哉の剣が刺さった

エラコルダ「ぐ・・・」

秀哉「なつ、だ大丈夫か？」

エラコルダ「心配するな。この大会では最先端の医療がそろつてる。むやみやたらに斬られても、心臓と頭をつぶさない限り、生きられる」

秀哉「！！？ マジで！？ ・・・スゲエ」

エラコルダ「・・・と、言つても俺も限界みたいだあ・・・」

ドサツ

エラコルダが倒れた

俺はとつさに肩から剣を引き抜き、鞘に戻した

エラコルダの周りに審判が駆け寄つてくる
審判が何か合図らしきものを送つている

司会・男「エラコルダ選手戦闘不能とみなされ、よつてシユウヤ選手の勝利！！」

その声とともに体つきががつしりしている大男が一人ぐらい現れた

そしてエラゴルダを会場内に連れて行く

(秀哉) . . . ハツ！！ そういえば俺、この1回戦目勝った
んだよな

圭哉「兄さーーん！！早くこっちに降りてきてーーー！」

秀哉「あ、おう！！」

・・・剣技大会つて結構大変だな。
俺的には精神にくるつづーか・・・。
とりあえず、2回戦目、頑張るか。

剣技大会当日（続（前書き））

多少グロイ表現が使われています。
苦手な方はお控え下さい。

剣技大会当日（続）

剣技大会・続

秀哉「よーし2回戦目、相手がどんなヤツだろーが絶つて一勝つてやるー！」

圭哉「いいよ、兄さんそのいきー！」

司会・男「^{バトルフィールド}2回戦、28試合目・・・ガリア選手対シユウヤ選手!
！対戦場へー！」

ガリア「へえー、こんなクソガキでも2回戦に出てくるヤツがいるのか・・・が、ここでお終いだぜ、ガキ！！」

秀哉「うつせーな、四の五の言わずにかかつてーいやーー！」

ガリア「んじや、いくぜ」

司会・男「^{バトルスタート}試合開始ーー！」

ガリア「おうらよつとーー！」

ガリアが大きめの剣を大きく縦に振りかぶつて、勢いよく振り下ろしてくる

ガアアアアアンーー！」

ものすごい音が会場に鳴り響いた

何とかかわせたものの、飛び散つてぐるフィールドのコンクリートが痛い

秀哉「ハア、ハア、なんて力だ・・・」

ガリア「早速息切れか？最近の若者とかいうのは体力がねーな

秀哉「！？」

今度は横振りで素早く秀哉を襲う

秀哉「がああつっ！－！」

ズザー――ツ

勢いよく体がフィールドとすれる音がする
俺はフィールドの端のギリギリで止まつた

秀哉「・・・ハア・・・・ゼエ・・・ゼエ・・・・」

(秀哉) クッソ・・・息すんのが、精一杯だ・・・

何とか、立たねーと・・・

ガツツ

剣をコンクリートに突き刺して、それを支えにして立つた

ガリア「ほう、あれをまともに横から受けてまだ立つとは・・ちい
つたあやるじやねーか、ガキ」

秀哉「・・・」

ガリア「でも、まともにくらつてちやあ、ド素人同然の雑魚だけどな」

秀哉「・・・（怒）

ガリア「ん？」

・・・許さねー。あんだけ人を馬鹿にして・・・むかつぐ・・・
てか、絶つて一ぶつ飛ばしてやる

俺は剣を野球のバットのように持ち、剣をバットのように構えた
そしてゅっくり相手ガリアに近寄っていく

ガリア「テメー、何がしてーんだ？野球なら、他のガキとしてこい」

秀哉「くらえ、（名付けて）大かぶりホームランッ！！」

最初の方はぼそつとつぶやくように吐き、技名（即席）は大声で
叫んだ

と、同時に剣をバットのように大きく振る

まるで、野球を始めた頃の素人がやる大振りかのように

ガリア「！？」

一瞬退いたガリアはその場を動けず、腹部に剣が入った
といつても、頑丈な体だけあって切れた傷跡はなかつた
出血しなかつた

ガリア「痛つてー・・・て、ん？」

いつの間にかガリアの周りに審判がいた
またもや合図を送つて いる

司会・男「ガリア選手対戦場から落ちてしまったため、敗北決定^{アウト}
よつて、勝者はシュウヤ選手！！」

大かぶりホームランの勢いでフィールドから落ちてしまつたらしい

・・・ラッキー？・・・うん、ラッキーだな

剣技大会当日（続編（前書き）

どうにも同じ感じの話がだらだらと続いておりますが、こんなものでよければご覧下さい。

剣技大会当日（続続）

第3回戦の俺の相手・・・

ほつそりとした体つきに
顔を覆うフード付きの長いローブのようなマント
常に下を向いていて顔が見えない
身長は少し低い（とは言つても、たぶん俺より高い）

相手「・・・やつやと始めや」

司会・女「では、バトルスタート試合開始」

どつから来る・・・

3回戦となればかなりの強者が集まつてくれる
俺はどつちかというと運で勝つってきたから
もつやくそろ負けるだらうな

司会・男「両者ともにらみ合ひて動きませんーー」

司会・女「じゃあひと選手の紹介をしようと思こます」

紹介？そんなモンあつたか？

・・・

第3回戦からあつたな・・・

司会・男「まず、液晶ビジョンの方にいる選手がシユウヤ選手！！」

今大会は初出場、年齢は15歳と子供の彼は、運を頼り
にここまでい上がってきた！！

しかし、現在行われている第3回戦の相手は・・・

司会・女「サウエル選手。前回の大会の優勝者であり、前々回の大
会では決勝戦で試合放棄をした

あの男！シユウヤ選手の運もつきたも同然、サウエル彼は双剣
をしなやかに扱う

剣の術士だから！』

秀哉「！？前回の・・・優勝者だつて・・・？」

圭哉「どうりで強すぎるはずだよ・・・いくら兄さんが強運の持ち
主でも実力差がありますがー！」

サウエル「あ・・・さつと終いにしてしまおう・・・」

低めの声でゆっくりと話す

サウエル「・・・来ないのか？」

秀哉「・・・お、オリヤアーッ！』

ガンツ！！

サウエル「・・・鈍い・・・」

スツ

秀哉「！？消えた・・・？」

・・・

ゾクゾクツ

何か背中当たりに寒気が・・・

秀哉が後ろを振り返つてみると・・・

ふわり・・とんっ

サウエルがゆっくりと片膝をつくよヒヨウに
対戦場フィールドに立つた

秀哉「・・・?！」

何か・・・違和感が・・・

ドスッ・・・

鈍い音が響き渡つた

秀哉の腹部に一発殴りのようなものが入つたからだ
何がどう秀哉を殴つたのかがよく分からぬ
殴られたのは確かだ

秀哉「あんたは・・・一体・・何者・・・?」

サウエル「俺は・・・」

剣を鞘に收めながらサウエルは言った

サウエル「世界一の双剣使い・・・」

秀哉「ふ、ふざけるなつ、「ゴフッゲホツ・・・」

サウエル「騒ぐな・・・」

秀哉「俺はまだ戦闘タウノ不能じやねーのに剣を鞘に収めるなんてつ、ゴホツ」

咳が止まらねえ・・・

くつそお、何がどうなつてやがる

サウエル「少年・・・よく覚えておけ・・剣士が剣を鞘に収めたとき、勝敗がついたと言つことだ・・と」

秀哉「!?」

目が・・・かすれて・・・
ぼやけてきた・・・
力が・・はいらねえ・・・

ドサツ

秀哉の体が倒れた

サウエル「これ以上少年を傷つけたくない・・・彼は意識がないはずだ・・・終わりだ、この試合は・・・」

圭哉「兄さん・・・」

大会終了後

(秀哉) 「こは何処だ・・・

蒼い・・・

緩やかに揺れている・・・

居心地が良い・・・

・・・

誰だ・・・

俺を呼んでいるのは・・・

俺はこのままずつと・・・

このままでいたい・・・

呼ぶな・・・

それ以上・・・

秀哉「叫・・・ぶ・・・な・・・」

圭哉「兄さん、兄さん!-!」

秀哉「・・・?・圭哉!-?お、俺は・・?」

秀哉「よかつた・・・。気がついたみたいで。」

秀哉「圭哉? 何があつた? 俺はどうしてここの? こは何処だ?」

圭哉「順を追つて説明するよ」

秀哉「ああ。わかりやすく頼む」

圭哉「 まず、第3回戦で意識を失つた兄さんはこの治療室に運ばれてきたんだ。

で、約5時間、兄さんは意識を失つてたんだ。

おかげで大会が終わっちゃつて・・・。

で、僕が呼びかけてたら兄さんが起きたって事。

分かつた？兄さん」

秀哉「 ああ。よく分かつた（所々嫌みが入つてるのは氣のせいだ
うつ）」

サウエル（以下サウ）「 意識は戻つたか？少年の兄は」

圭哉「 はい。すみません、わざわざこんなに待たせてしまつて。
無理矢理にでもたたき起こせばよかつたんですけど・・・」

秀哉「 ・・・ついでかい！怪我人を無理矢理たたき起こすつてお前！
？何考えて・・・」

圭哉「 別に良いじゃない、兄さんは体が丈夫なのが長所だもんね」

秀哉「 つったぐ、これだからこいつはお調子者なんだよ」

サウ「 あまり騒ぐでない。切り傷はないといえども、痛みが走るぞ」

秀哉「 痛つ・・・！」

サウ「 いつたそばから・・・もつ少し横になつてじつとしておれ」

とサウエルが言つと秀哉を無理矢理ベッドに押し倒した
そして秀哉の顔に手をがざす

サウ「じばりく眠れ。少年の性格からゆけばじつとしているのは寝
ているときのみのようだからな・・・」

秀哉「う・・・う・・・ん・・・・・・」

くわつ、なんだこれは！？
まぶたが重たい・・・
視界が・・・ぼやけて・・・
もう・・・限界だ・・・

秀哉「・・・すう――・・・すう――・・・」

圭哉「眠りましたね」

サウ「・・・・・・」

圭哉「・・・」

サウ「これを少年達にあげよつ。こりこりと使いがよい

圭哉「え、あ、はい。ありがとうございます」

ガシャツ！――！

圭哉「がしゃ・・・・？」

サウ「優勝賞金の半分ほどだ。少年達のものだ。好きに使え

圭哉「え、でも、そんなのもいらしゃませんよ……」

サウ「……少年の兄の治療代としてなさいりつていただけるか?」

圭哉「……どうしてでもとこづなり」

サウ「……まだどこかで会つてあります、祈つてござる。

体には氣をつけるよ、少年達……」

圭哉「え」

圭哉が振り返ったときにはサウルの姿はなかった
謎多き人であつたサウルとは別れた。

圭哉「……」

圭哉「兄さんの寝顔……ちぐへ穩やかな表情をしてて……なん
だか……」

秀哉「…………ん…………け…………い…………あ…………
…………圭…………哉…………」

圭哉「兄さん……」

ふと下を向いた圭哉の顔には光る何かが流れていた
涙を流していた

そのまま静かに時は過ぎてゆき
気づくと時計の針は8時を指していた
圭哉も疲れていたのか
死んだように眠っていた

大会終了後（後書き）

ま、まだ、主人公（一応、秀哉）は死んでませんよっ！！（まだまだ連載するつもりです）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6067d/>

時の記憶

2011年10月4日19時08分発行